

地域共生社会推進フォーラム
2023年12.15(金) 14:00-16:30
まちとのつながりが、孤立を癒す薬になる。

参加費 無料
定員 200名
事前申込
会場 京都府立京都学・歴史館 (大ホール)
講演 西 智弘さん
タイムスケジュール
13:30 開場
14:00 開会あいさつ
14:10 講演《西智弘さん》
15:15 休憩
15:25 協会ラヂオ
16:25 開会あいさつ
16:30 閉会

まちとのつながりが孤立を癒す薬になる

2023年12月15日(金)、京都府立京都学・歴史館にて、昨年度に続き2回目となる協会主催の地域共生社会推進フォーラムが開催されました。第1部は、神奈川県川崎市の医師である西 智弘先生をお招きし、ご自身が開設されている「暮らしの保健室」での取組の紹介をいただきました。

第2部では、1日限りの出張ラヂオ局を開設。「小さな想いからはじまる ものがたり」をテーマに、第1部で講演をいただいた西先生、パーソナリティに花園大学の福富昌城先生、協会職員の杉本志保さんとともにラヂオ番組のような形式でトークセッションをしていただきました。

◆ 第1部 ◆ 社会的処方 ～まちとのつながりで人が元気になる方法～

西先生は、在宅医療・腫瘍内科の医師として従事するかたわら、一般社団法人プラスケアにて「暮らしの保健室・社会的処方研究所」を開設し、病気になっても怖くない、安心して暮らせる、人とつながれる場を提供する活動をしてられます。

現在、日本では年齢に関係なく孤立、孤独化が問題ですが、そもそも健康の定義は、「身体的、精神的及び社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病又は病弱が存在しないことではない。」つまり社会参加や人とのつながりが存在することで健康を保つ

ことができる。そして「自分はこのまちとつながっている。」「誰かが見ていてくれる」という安心感により、孤独や社会的孤立の改善が図れると西先生。

西先生は、今後の京都においてもこの社会的処方の取組を文化にする必要があると話されましたが、京都に住む人たちと対等な関係性の中で、新たな価値を一緒に見つけ出していく行いが、私たち京都の社会福祉法人で従事する者が担うべき役割なのだと改めて感じました。

Talk Session ～エピソードをうけて～



福富先生

昔、よく言われていたのが施設の社会化。老人ホームは、入居している方が施設の外と繋がれるような場所でないといけない。もうひとつは、施設の中でも、今まで家で暮らしていたような生活に近づけていかないといけない。ということ思い出しました。

2つ素敵ながあって、まずは地域の方が「危ないし、うちの駐車場を使って」と言ってくださること。そして門限の話では、援助者も仕事として関わっているので、職務上の時間や段取り等の縛りが、職員もご利用者も縛られてしまうことがあります。でも、施設に連絡をして、時間延長しながらフレキシブルに対応しています。決め事だけでなく、その人、その時に応じて対応をしている施設っていいなって思いました。

自分たちができることをちょっとずつ、まちの方たちを含め、施設の職員さんやみんなができることを持ち寄りながら「ルールだからだめ」とか「できません」ではなく、「どうしたらできるだろう、どうしたらこの場を楽しんでもらえるだろう」と考え、施設に入っている入居者さんだからというのではなく、「目の前の方々にこのまちのことを楽しんでもらえたら」という気持ちでやっているのではないかと思ったので、すごく良い地域だなと思って聞いていました。



西先生

先生が仰るように、私たちができることや地域の方がしてくださることはいっぱいあるのだろうなと思います。でも、それをする場というのは接点がないと生まれません。今回、ご入居者が地域の方と接点が生まれたことで「うちの駐車場を使って」と言ってもらい、できることが生まれました。

そうすると1部のリンクワーカーの話と同じで、「まちの中のできる人」を見つけていくということに繋がります。こういう風にしたらできる人をいっぱい見つけれられるってコツは、先生ありますか？

地域の人たちが、お祭りだったり、まちのことが好きなのだろうなということが滲み出ている、まちが好きだから、「駐車場をあけますよ。」と言ってくれたり。消防団の方もお祭りに参加してくれる人達が、いかに良い気持ちで帰ってもらおうかみたいに思えるのは、「自分たちのまちが好きだから、もっと楽しんでもらいたい」みたいな、おもてなしの精神がお話から滲み出ていると思いました。一人ひとりが自分達のまちのことが好きで、他の人達にも知ってもらいたいと思っているまちって強いなと思います。

三条通のまちの繋がり、そしてこの人たちがお祭りのことを大事にしているということが、その人たちの持つ強さですね。私たちも案外色々と思っているのですが、その時に、まちが持つ強さや可能性をいかに掴まえることができるのかが必要なのだと思います。日々の仕事の中でも周りのことを見ていくことで、周りの人が持つ強さや素敵なことに少し敏感になっていくと、いろいろな繋がりができていくのかなと。そんなことを考えさせられるエピソードでした。



福富先生

◆ 第2部 ◆ 協会ラヂオ 小さな想いから はじまるものがたり

第2部の協会ラヂオでは、職員に「小さな想いからはじまるものがたり」を募集。多数応募があった中から、7つのエピソードを紹介しました。そのうちの一つを紹介します。

祇園祭 還幸祭

今年の祇園祭の還幸祭は、三基のお神輿が三条通を渡りました。八坂神社へのお還りを見るため、ご入居者が車いすに乗って見学に。でも施設近くの三条通は道幅が狭く危険です。すると地域の方が「危ないし、うちの駐車場あけるからそこで見てなあ。」とシャッターをあけてくださり、急遽ご入居者の特等席に。業務を終えた職員も立ち寄り、楽しい雰囲気となりました。

久しぶりの三基のお還りで、思いがけず時間がかかりましたが、ご入居者の希望を聞き、職員から「最後までお見送りしたいそうですが、門限に間に合いそうにないので、玄関を開けておいてください」と施設の宿直さんへ連絡。最後のお神輿まで無事お見送りができました。

暗い帰り道、消防団員の誘導灯に守られながら、施設へと帰宅されました。



エピソード

フォーラムの様子はYouTubeをご覧ください



2022年



2023年

人事交流研修×札幌市社会福祉協議会

2023年11月8日-10日

協会では、政令指定都市で福祉・介護事業を運営する札幌市社会福祉協議会、横浜市福祉サービス協会と以前より交流を行っています。

2008年からは、職員がお互いの法人を訪れ学び合う交流研修を行っています。

近年は新型コロナの影響で中断を余儀なくされていましたが、昨年11月8日～10日の3日間、札幌市社会福祉協議会の職員3名（水野さん、吉村さん、内山さん）の受け入れを行いました。お忙しい中ご協力いただいた事業所の皆さんに感謝いたします。同じく大都市の大規模法人として、お互いに学び合う貴重な機会となりました。



こんな3日間

内山さんのスケジュール



1日目

本部へ
これまでの協会、各事業、地域共生社会推進センター、人材育成、採用の説明。



2日目

塔南の国・南事務所へ
塔南の国では事業所の説明と、パン販売を体験。ご利用者がパンを選び購入されるお手伝い。南事務所では、訪問介護、ナイトケアセンター、訪問看護、居宅介護支援の説明。



3日目

山科・伏見事務所へ
事務所の職員さんとランチミーティング。実際にご利用者宅への訪問にも行きました。最後に振り返り。



参加した水野さんから

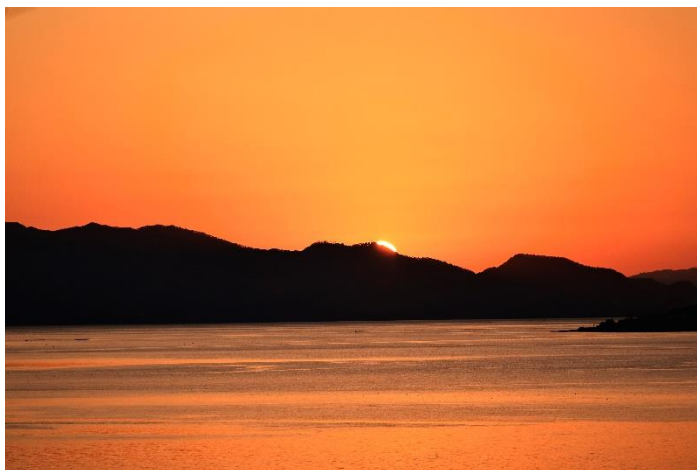


3日間大変お世話になりました！

3人とも、これまでの仕事で感じられないほどの刺激！と実り！を得ることができました。そして皆さんのサービス協会愛が伝わりました。宮路理事長始め、ご多忙中、関わってくださった皆さんには感謝申し上げます！

下坂厚の写真日記 12

記憶とつなぐ



最近では昔より長生きできる人が増えて、人生 100 年時代と言われています。

80 歳代後半では 4 割、90 歳代前半では 6 割、90 歳代後半では 8 割の人が認知症になっているそうです。統計では、65 歳以上の人の 6 人に 1 人は認知症だということですが、世の中はまだまだ認知症のイメージが良くないようです。

物忘れや、できないことが増えるとどうしてもそのことにこだわってしまいます。でも、そこばかりに囚われていると本人も周りの人も辛いです。

認知症になって、物忘れや失敗することが増えても「自分は自分」と思える方がいいです。そのためには、まだできることを頑張りながら、日常の中で楽しみや感謝をすることを大事にしていくことでしょうか。

Instagram は QR コードを scan



ATSUSHI_SHIMOSAKA



昨秋から、洛西口駅の近く「ようこメンタルクリニック」にて、認知症の診断を受けられた人へのピアサポートをしています。認知症の診断を受けて間もない人は不安が大きく、その不安を少しでも軽減できればと思っています。私自身が認知症になってからの経験を聞いてもらうことで、「自分だけじゃないんだ」「認知症になってもまだまだできることもあるんだ」と理解していただき、「気持ち楽になりました」と言ってもらえます。

「人に迷惑やお世話をかけたくない」と言われる人がほとんどですが、いずれはみんなが認知症になるかもしれないんですから「堂々とお世話になりましょう」「お互い様ですよ」とお話しすると、うんうんと笑っていただけます。

ピアサポートをさせていただきながら、こうした認知症の人への心理的支援がとても大事だと感じます。

新しい人事評価制度の目指すもの

◆ 人材マネジメント室より ◆

協会では、昨年度、有志の職員の方々によるプロジェクトにより、人事評価制度の構築が進められました。その後、職員への説明を経て、今年度は各種導入研修の開催、新しいシステムの導入などが進んでいます。

皆さんのお手元の『人事評価制度ハンドブック』の巻頭、理事長は、この制度の目的として、私たち職員一人ひとりが「働きがいを持って自分らしく働き続ける」ためと記しています。プロジェクトで議論を尽くし考えた、協会の求める人材像に向け、職員それぞれが能力や特性を発揮し、「自分らしく働き続ける」ことができる制度となっています。

ご存じのとおり、福祉業界を取り巻く環境が刻々と変化し、私たち自身の働き方や仕事の価値観も多様化しています。将来、協会として、また、職員としてどうありたいか、どのような役割を担うべきかを制度の中で思い描きました。職員の

皆さんの成長とともに、協会が目指す姿の実現につなげていきたいと思ひます。

評価トライアル期間中、職員の皆様には、更なる制度理解と納得感を深めていただくために、各種評価トレーニングを実践していただきます。人事制度は、協会一体化の象徴の一つでもありますので、今後も協会を挙げて取り組んでいきます。

